

學界展望

第九回國際宗教學

宗教史會議について

有賀 鐵太郎

一

第九回國際宗教學宗教史會議（一九五八年八月二十八日—九月九日）のあらましを、ここに記録しておきたいと思う。その名稱は英語では *The Ninth International Congress for the History of Religions* とするのであるが、日本語では、内容に即して、「宗教學」の三字を補つて譯しているわけである。この會議は第九回であるが、第一回は一九〇〇年にパリで開かれ、その後第八回までの年と場所とを列擧すれば、

第二回、一九〇四、バーゼル

第三回、一九〇八、オックスフォード

第四回、一九一二、ライデン

第五回、一九二七、ルンド

第六回、一九三五、ブラッセル

第七回、一九五〇、アムステルダム
第八回、一九五五、ローマ

となる。したがつて、これまでは欧州以外の地では開かれたことがなかつたものであつて、第九回を日本で開いたことによつて従來の例が破られたことになる。また日本側としても、戦後人文系の國際學術大會が日本で開かれたのはこれが最初なのであつて、その意味においても、それは歴史の意義を持つ會議であつたと言える。この會議の母體機關は國際宗教學宗教史學會 (*International Association for the History of Religions*) であつて、現在の會長はローマ大學のベッタツォーニ教授である。事務總長はアムステルダム大學のブレイカー教授が勤めている。日本での會議を主催したものは日本學術會議である。

會議は主として東京で行われ、会場には産經會館が當てられた。八月二十七日午後一時から登録がなされ、翌二十八日（木）の午前九時三十分から正午までが開會式、午後二時から五時までは四部門に分かれての研究發表會が行われた。二十九日（金）は午前九時に始まり、午前も午後も研究發表會が行われた。第一部門は前日で済んだので、第二、第三、第四部門に屬する研究發表會が四室に分かれてなされた。八月三十日（土）の午前中にも同様四室に分かれての研究發表會があり、午後二時—五時には合同會議 (*Plenary session*) と稱して、全員一堂に會して六人の學者の研究發表に耳を傾けた。

本會議の一般的主題としては「過去及び現在における東洋の宗教」なる題目が掲げられており、事實それに沿つた論文が數

多く讀まれたが、必ずしもそれに限定されていたわけではなく、宗教學の殆んどあらゆる問題がいろいろの形で取上げられていた。部門としては1未開宗教、2古代の宗教、3現在の宗教、4宗教學一般、となつていたが、このうち第一部門に屬する研究發表は意外に少数であつた。これには偶然的な要素も加わつてゐるであらうが、宗教學者の關心が一時ほどに未開宗教の現象に集中されなくなつた事實を反映するものと見てよいであらう。

本會議に續いて八月三十一日と九月一日とは日光および東京地區の調査旅行があり、しかるのち九月二日から四日までは「東西の宗教—過去百年における文化交流」と題するシンポジウムが開かれた。その一般的主題はさらに幾つかのトピックに分かれたれ、分團協議と全體會議とによつて討議が進められた。このシンポジウムの計畫はユネスコの協力によつて成立したものであつて、最後の全體會議のときにユネスコに對する勧告が採擇された。

これで東京におけるプログラムは終り、九月五日から七日にかけては伊勢および奈良地區の現地調査が行われ、その一行は七日の夕刻に京都に到着した。八日は京都の社寺を訪問、夜七時三十分からは關電ホールで公開講演會が開かれた。講師は前記ベッタツォーニ教授とボン大學のメンシング教授とであつた。かくて九月九日(火)午前十時三十分には京都大學において閉會式が開かれて、第九回國際宗教學宗教史會議は盛會裡にその幕を閉じたのであつた。しかし、それから後も京都になお數

日滞在する外人學者も多かつたので、京都地區實行委員會としてはそれらの人々のために東西本願寺訪問、南禪寺訪問などの世話もしたのであつた。ある人々はまたさらに高野山にまで足をのばした。

會議全體としての参加者は日本人三五四名、外人一二三名、計四七七名の多數に上つた。そのほか準會員として登録された人々は一一四名であつた。そのうち、研究發表をした人の數は内外人あわせて九五人であつた。外人参加者は歐州各國、オーストラリア、北米合衆國のほか、エジプト、パキスタン、インド、ビルマ、タイ、ヴィエトナム、ラオス、インドネシア等の國々からであつた。南朝鮮からも一名の参加者があつた。このように東洋諸國からの比較的多數の参加者をえたこと、またアメリカからも多くの學者が参加したことは、これまでになかつたと聞いているが、これは會場が日本であつたということのもたらした結果の一つと見ていい。これまで餘りにも歐州中心のであつたこの會議が、これで文字通り國際的な會議となつたわけである。その上この第九回會議の開期中に「アジア・アフリカ部會」の設置についての下相談もできたのであつた。

二

第九回國際宗教學宗教史會議についての外側的叙述は概ね右の通りであるが、もう少し内容的に立入つた報告もしなければならぬ筈である。だが内容的といつても四つの室に分かれて並行的になされた研究發表を皆聞くことは事實上不可能であつ

たのであり、またたとえそのアブストラクトによつてその要旨を知ることはできるとしても、その多種多様な研究發表について一々語れば徒らに紙数を費すこともなろう。いづれ英文のプロシーディングズが出ることになつてゐるから、詳しくはそれを讀んでいただくに越したことはない。だから、ここにはただ筆者が觸れた限りにおいての、感想の一端を書きとどめることにしたい。

およそいかなる思想でも何らかの意味で宗教とのつながりを持たない思想というものはない。それはその思想が明らかに宗教を否定している場合においてもすらも認められなければならない事實である。なぜなら、それが思想である以上、それが否定する宗教についての何らかの概念を持たないということは有りえない。そこに、その特定の概念に對する否定としての宗教否定が成立しているのであつて、その限りにおいて、その特定の思想はその特定の宗教概念と不離の關係にあるのである。ただたんに宗教そのものを、何らの定義をも下すことなしに、否定するのであれば、それは取るに足らぬ暴論であるか、せいぜい一種の感情論であるに過ぎない。そしてそれが後者の場合であるならば、その感情の由つて來たるところを分析すれば、それがいかなる宗教に對する反感にもとづくものであるかをほぼ推定することもできよう。一般に思想と宗教との關係がそのようなものであるとすれば、いわんや宗教學者とその自身の宗教との關係が問題とならないわけはない。宗教學はもとより純粹に學問的立場から宗教を研究し、また論じる筈のものであるか

ら、ことさらに何らかの偏見の上に立つてなされる宗教學があるとするれば、それはすでに宗教學の名に價しないものである。けれどもまた宗教的信仰はその信じるところを眞理としてこそ成りたちうるものであるから、その人の信仰が何らかの形においてその人の學的判斷に反映しないということも有りえない。であるから、國際宗教學宗教史會議に出席參加した人々がいかなる宗教を背景として持つてゐるかを考察することは無益なこととは思えない。

その宗教的背景は、參加者たちがいかなる國または民族に屬するかによつて凡その推定が可能である。それによつて類別すればキリスト教、イスラム教、ヒンズー教、佛教等になることは言うまでもないのだが、それらの宗教のいづれかを背景とする學者が自分の所屬する宗教を研究の對象とする場合と他宗教を研究の對象とする場合とによつて、その學的態度に多少の差異が生じることも可能であり、また自然ともいえる。しかし苟しくも宗教學者である限り、人は單にドグマティシユに自分の信奉する教理を絶對的なものとして提示することはできない。たとえ自分の信仰するところを眞理として主張するとしても、それは何らかの意味における他宗教との比較を通しての辯證の形をとらざるをえない。またそのような立場から他宗教を研究するとしても、後者を端的に誤謬とか邪説とかと極めつけることはなく、むしろそのうちに含まれる眞理内容を汲むに吝かならざる態度をとらざるをえないであらう。ところで今度の參加者たちのうちで、自分の宗教以外の宗教ないしは宗教現象に

對する關心の度合はキリスト教系統の學者において特に著るしかつたと言つてよい。これはこの學會の一般的主題が「東洋の宗教」であつたため、そうなるのがむしろ當然であつたとも言えるのであつて、東洋の學者としては、西洋の學者たちの場合とことなつて、自分たちの宗教について語る事が、その主題に沿うゆえんでもあつたのである。けれども、われわれは、この連關において、宗教學、宗教史、比較宗教學などの學問が成立したのは西ヨーロッパにおいてであつたとの事實を想起する必要がある。そしてそれらはキリスト教神學と直接または間接の關係において發達したものである。當初は殆んどの場合宣教師たちが傳道の必要上または傍らに、その土地の宗教について多少の研究をしたことに端を發したものであるが、それが西洋に東洋の智慧を導き入れることになつたのもあり、その事はキリスト教神學そのものの方法にも大きな變革をもたらした事は歴史の記す通りである。中には宣教師として東洋に派遣された者でありながら東洋の宗教を研究するうちに遂にこれに歸依するに到つた幾つかの例も數えることができる。全體として見れば、そのような結果は比較的稀であつたとしても、なお東洋の宗教に眞理性を認めることは、いわゆる異教に對するキリスト教側の態度を修正あるいは變革させないではおかなかつた。

かくして近代的自由神學者たちはキリスト教のみが絶對的啓示であるとするドグマティズムを放棄して、キリスト教を宗教史との連關において、また人間一般の宗教經驗と照合しつつ、再解釋し、そのような角度から改めてキリスト教の眞理内容を

第九回國際宗教學宗教史會議について

辯證しようとしたのであつた。かれらはまた宗教史的連關を求めることがキリスト教自體の歴史的成立を説明また理解する上に不可欠な手續であることを悟つて、メソポタミア、エジプト、小アジア等に關する宗教史の開拓にとめたのであつた。さらにまたギリシア・ローマ世界の宗教現象も、そのような觀點から研究されたのであつた。そして、そのような學問的傾向の先端を行つた者が、かの「宗教史學派」の人々であつた。

三

このような事情をかえり見れば、このたびの學會に参加した西洋の學者たちのうち、宗教史學派（この名稱は現今では用いられてはいないが）の流を汲む人々が可なり多かつたこともうなずけるのである。ことにハイラーのような學者はその代表的な人といふべきであらう。だが、それなら、そのような傾向は今日の歐洲の學界では一體どのような立場におかれているのであるか。少くとも神學との關連においては、それは小さからぬ抵抗を排しつつ進まなければならない事情に置かれているものと察せられる。というのは、第一次大戰直後に始まつたバルト的神學運動は歴史主義および心理主義を排して啓示神學の再興を企て、神の言の啓示としての福音を、宗教史はむしろのこと、キリスト教史または歴史的キリスト教からさえも獨立させようとしたのである。この神學運動が歐洲はもちろん、歐洲以外の地まで廣く反響を呼んだことは周知の通りであり、ことにドイツにおいてはそれがヒトラーの全體主義の彈壓を受け、また勇

敢なレジスタンスの支えともなつたことによつて、その主張の根強さを證示したのであつた。

この強力な神學運動は、然しながら、宗教史學派に對する殆んど決定的ともいふべき打撃を與えてしまつたのである。その結果として、宗教學者たちは歐洲の神學界から見れば、わずかに周邊にうごめく存在として残つたかの感がある。そのような結果にならざるを得なかつた歴史的經緯を否認することはできないのであるが、そうだからと言つて、そのような結果が本質的に満足なものとは考えられない。従つてバルト神學に對する反對論も起つて來ざるをえないのであつて、そのような動きが宗教史に關心を持つ神學者たちのうちに強いこともまた當然といふべきである。今度の學會に出席したハイラーおよびメンシング、また一九五七年から五八年にかけて日本に來ていたベンツなどは、いずれもバルト神學には反對の立場に立つている。このような背景に照らして考察するならば、國際宗教史學會、従つてまた國際宗教史會議を支持するヨーロッパの學者層は過去四十年にわたるバルト神學からの批判と戦いながら、その主張を續けて來た人々によつて成るとも言えるであらう。

それは大雑把に言つて、たしかにそう考へて差支えないと思うのであるが、われわれにとつて有意義なことは、ヨーロッパ宗教思想における、その二つの相反する勢力の緊張を認識することである。そこには一方に福音の啓示を一切の人間の經驗および歴史から斷絶せしめようとする傾向があり、他方に一切の

宗教における統一と相互理解とを求めようとする傾向がある。前者にとつては宗教現象の種々相と統一の問題は、キリスト教のそれをも含めて、一切その意味を喪失する。それに反し後者はあくまでも人間的立場に立つて宗教における相異と統一との問題と取組んでいこうとする。そして、前者は後者の、また後者は前者の反立として、始めてそれぞれの意義を獲得するものである。

このように考えることによつて、かの開會式におけるハイラーの特別講演の意義も一層明らかになるのではないかと思う。かれはそこにおいて諸宗教の根源的統一を強調したのであるが、それは同時にセム系の三大宗教、すなわちユダヤ教、キリスト教、イスラム教にまつわる排他性と不寛容性に對する厳しい批判を伴つていた。ハイラー博士はマーブルグ大學神學部の教授であり、ルーテル派教會に屬するキリスト者であるのだから、そのような批判はまた自己批判でもある。かれはアーノルド・トインビーの *An Historian's Approach to Religion* を過去十年間に著わされた最も勝れた神學書（しかも、それはいわゆる神學者によつて書かれたものではないにかかわらず）として推賞しているが、そのトインビーの指摘して止まない點も、まさにその三大宗教の持つ排他性と不寛容性である。したがつてハイラーは辯證法神學がキリスト教聖書以外における啓示を一切認めようとしなないことに反對の意を表明せざるをえない。かれは高度の諸宗教 (higher religions) の間に神秘主義的救済宗教と豫言者的啓示宗教との類別を認め、かつそれぞれの

類型のうちにおいても種々の相違があることをも承認するのであるが、それにもかかわらず、それらのすべてを通じて「究極的な、最も深い統一」があることを主張する。その統一は次の七つの点について見出すことができる。1 超越的なもの、聖なるもの、神的なるもの、他なるものの實在性。2 この超越的實在が人間の心に内在すること。3 この超越的實在が人間にとつての最高真理かつ最高善であること。4 この實在は、人間に、また人間のうちに、それ自身を啓示する究極的愛であること。5 人が神に到る道は献身(自己放棄、禁欲的行など)の道である。6 神への道は同時にまた隣人への道(隣人愛、一切の生物への愛、敵への愛)である。7 愛こそは神への最上の道である。宗教學はもとより宗教の學的研究に従事するものであるが、それがその研究を通して諸宗教の究極的統一を明らかにすることは大きな實踐的意義を持つものであるとハイラーは力説する。だが、その事は諸宗教がただ統合すべしということではない。かえつて、そのようなシンクレティズムは最も警戒すべきものであつて、宗教學は宗教の多様性をこそ尊重すべきである。けれども宗教學はまたそれら多様な内容を持つ諸宗教相互の理解と相互の學びあいとを促進すべきものであつて、「もし諸宗教がかくの如く相互に理解しあい、また協力するならば、それらは、最も目ざましい政治的努力のあらゆるものにも勝つて、人類社會(ヒューマニティ)の實現に向つて、したがつてまた世界平和に向つて、より大きな貢獻をもたらすであろう」。

第九回國際宗教學宗教史會議について

四

右に概括したハイラーの發會講演は確かにヨーロッパの背景から理解された宗教學の任務についての基調を示したものであるのであつて、それがまた今度の會議を一貫する精神でもあつた。京都における公開講演會でメンシングが「宗教における寛容性と眞理性」について語つたときの論旨も同じ方向を指し示すものであつた。かれは寛容性を形式的寛容性と内容的寛容性(formale Toleranz; inhaltliche Toleranz)とに分け、たんに信教の自由を認めるといふ形式的寛容性から、さらに進んで内容的寛容性に向わなければならないことを主張する。そして、内容的寛容性とは他宗教にも聖なるものとの出會いの可能性を認めることを意味する。いわゆる豫言者的諸宗教は不寛容に傾くが、東洋の神秘主義はこのような内容的寛容性のよい模範を示す。キリスト教やイスラム教のような豫言者的宗教においても神秘主義は同様に寛容である。

今度の會議に出席はしなかつたが、トインビーもまた同様に諸宗教相互の寛容性を強調し、キリスト教がその排他性と不寛容性とを拂拭すべきことを提唱していることはハイラーの講演にもある通りであるが、この關係において、トインビーの「世界の諸宗教の間におけるキリスト教」(Christianity among the Religions of the World, 1957)は宗教學的見地からしても、またキリスト教神學の立場からも、無視できない重要な論旨を含むものであることを、ここに附記しておこう。

このように宗教學は排他性に傾く豫言者的諸宗教に深いまた
 嚴しい反省を促がし、かつまた東洋の諸宗教が含む根源的・究
 極的統一への指示に對して心からの同感を示そうとする。この
 事はまた東洋諸宗教の代辯者たちに大きな自覺をうながす結果
 をもたらしたのであり、かれらが自信をもつて自分たちの宗教
 の眞理内容を學的に提示しうる道をも開いてくれたのである。

ことに今回の、すなわち第九回國際宗教學史會議が始めて
 ヨーロッパ以外の地で、しかも極東の日本で開かれたというこ
 とは、この意味において重要な歴史性を擔う事件である。日本
 を始め東洋各國の宗教學者がかくも多數この會議に参加して、
 外國人の目を通してでなく、自分たちの理解する自己の宗教ま
 たは宗教そのものについて、その所説を述べる機會を得たこと
 は、たんに國際宗教學史學會にとつてばかりではなく、實
 に人類の平和將來のために喜ぶべき現象であつたと言える。そ
 のように言うことは決して御座なりの祝辭ではなく、眞實の意
 味においてそうであると思う。しかしながら、それが御座なり
 の祝辭に終つてしまふ可能性もないことはない。すでに言つた
 ようにヨーロッパにおける宗教學は豫言者的宗教、特にキリス
 ト教、の絶對性の主張との強度の緊張において發展してきたも
 のである。ヨーロッパ大陸、イギリス、および北米において、

人々はキリスト教が他宗教に對して不寛容であつたばかりでな
 く、それ自身のうちにおいて相分れ相争つてきた事實を體驗し
 たのである。そして、そのような體驗が強度であればあるほど、
 またそれに對する反省も強かつたわけである。メンシングの言

う形式的寛容性としての信教の自由ということでも、歐米にお
 いても幾多の血なまぐさい經驗を通して漸くにしてかちとられ
 た原則であることを人は忘れてはならない。今日でもなお信教
 の自由の認められていない國々の數は可なり多いであろう。日
 本においても新憲法の下において始めてそれは無條件的に認め
 られるに到つたものである。それを更に推し進めて内容的寛容
 性を培養するということも、それを問題として提起したのは、
 その事についての強い緊張を體驗してきた西洋の宗教學者たち
 である。この點はよく留意されなければならない。かれらは東
 洋の宗教意識における究極的統一をたたえるのであるが、東洋
 の諸宗教における統一の概念そのものが、どれだけ批判的に自
 覺されたものであるかは容易に斷定できないことである。

東洋の諸宗教また諸宗派の間にも、寛容もあれば不寛容もあ
 る。排他性もあれば抱擁性もある。そこには東洋の宗教學者自
 身によつて改めて取上げられなければならない問題が横たわつ
 ている。われわれはただ西洋の學者から東洋宗教の統一性につ
 いて耳觸りのいいことを聞かされて有頂天になつていただけで
 は濟まされない。日本そのものについて考えて見ても、折角か
 ちえた（というよりも負けたこと）によつて與えられた、信教の
 自由をさえ再び失う可能性もなしとは言えない。さほどの苦勞
 なしに與えられた自由なら、また割合に氣輕に手離すこともあ
 るであろう。ただ舊憲法（そこにも條件づきではあるが信教の
 自由はあることになつていた）の下に信教の自由の制限が何を
 意味するものであつたかを身にしみて經驗した人々、その下に

おいて何らかの迫害の犠牲になり、または、なつた人々を身近な友として持つた人々、そのような人々だけは絶対的に信教の自由を妨げまたは脅やかす何者をも許さないであろう。またそのような人々は日本人の宗教的寛容性などということをも、そう樂觀的に語る氣にもならないであろう。こういう問題についての反省は、西洋の學者だけに委せておいたらいいのではない。日本はもとより、日本以外の東洋諸國においても、同様の問題があるに違いないのである。西洋の宗教學者がその西洋の歴史的地盤における問題を卒直に取上げたように、東洋の宗教學者もまた東洋の地盤において、それと同様の問題を取上げて然るべきものである。そうでなしに、ただ東洋的寛容性だとか抱擁性だとか言つてみても、それは不寛容の内實を蔽う美辭麗句に過ぎないであろう。

だがまた、それなら宗教の問題は寛容性と統一性の自覺とがえられれば、それで凡て解決するのと言へば、そのように簡単なものでもない。宗教學はまた諸宗教相互の間に、また同一宗教についての諸の理解の間にも、深刻な相異があることを認めざるをえないのであつて、それに對して目を閉じることが決して學的な態度とは呼べない。またハイラーも言うように宗教學は徒らなシンクレティズムを推賞するものでもないといふことは、宗教信仰の唯一性ということ、すなわち信仰の絶對性といふことも、あらためて宗教學の課題として取上げるべきものであると思ふ。バルト神學がキリストにおける啓示の絶對性を強調して自由神學および宗教史學派を極力排撃したことは、その

理由がなかつたのではないが、あまりにも否定的に過ぎたことは否めない。けれどもまた、それに對する自由神學者たちや宗教學者たちの反應もまた餘りに否定的に過ぎたのではないかと、ひそかに恐れる。二つの相反する立場の緊張はそれ自體としての作用を持つものではあるが、その緊張が本當に製産的にはたらきうるためには、その相反する立場が互に他を理解するということが、すなわち、それらが共に一つの意識のうちに置かれることがなければならない。

何人も自分が眞と信じることを拒げることは許されない。それを拒げてまで寛容性と抱擁性を持つてというなら、それは人の良心をふみにじる要求である。けれどもまた信仰の絶對性を偏狹な不寛容性と排他性によつてのみ守りうるものとするならば、その考え方もまた反省されなければならない。信仰の絶對性は必ずしも不寛容性を意味するとは限らないであろうし、また逆に寛容性を説くことは必ずしも自己の信仰の絶對性を放棄することにもならないであろう。宗教學の今後の重要な課題の一つは、絶對性と寛容性、唯一性と統一性との間に道を通じることであろう。それはすでにトレルチが取上げた問題ではあるが、今日われわれは改めてその問題に立向うべきであろう。宗教學者たちも、それぞれの宗教の神學者たちも、そのような道を見出すために、これからいよいよ眞剣に考究しなければならぬであろう。そうでないなら、宗教學が人類の平和のために貢献するなどといつても、それはただ一片の辭令に終つてしまふであろう。

(筆者 京都大學文學部〔基督教學〕教授)